きたことについて、このような貴重な機会を与えてくださった基礎研修会実行委員の方々に対して感謝の意を述べたい。

参考文献

- 1) 根本彰. 収集と蔵書構成. 図書館ハンドブック. 第2版. 東京:丸善;1999.p.747-53.
- 2) 大学図書館の仕事制作委員会. 第5章 図書館資料(冊子体). 知っておきたい大学図書館の仕事. 東京:エルアイユー;

- 2006.p.82-99.
- 3) 外国雑誌センター館[internet]. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/ncop/> [accessed 2007-09-12]
- 4) 外国雑誌センター館について[internet]. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/ncop/docs/center.html> [accessed 2007-09-12]
- 5) 電子ジャーナルのアーカイビングと保存に関する動向[internet]. USACO New Media News 2007年5月号;第174号. http://www.usaco.co.jp/news_archive/new_media_news/un2fc174.html#topics [accessed 2007-09-12]
- 6) 細野公男. 図書館コンソーシアムの現状とその課題. 情報の科学と技術 2005;55(3):108-13.

グループ討議 1-B：利用しやすい病院図書室のために－K病院の事例から－

恒田 杏子¹⁾, 山本 沙紀²⁾, 井手 貴広³⁾, 小田みゆき⁴⁾, 田平 奈央⁵⁾, 中山美詠子⁶⁾, 長谷川優子⁷⁾

(第三著者以降は五十音順)

東邦大学習志野メディアセンター¹⁾, 東京医科大学図書館²⁾, 関西医科大学附属図書館³⁾, 香川大学図書館医学部分館⁴⁾, 水島協同病院⁵⁾, 岡山協立病院⁶⁾, 埼玉県立がんセンター図書館⁷⁾

I. はじめに

本稿は、第14回医学図書館員基礎研修会において、資料構築をテーマに行った討議をまとめたものである。討議の参加者は大学図書館に勤務するものが4名、病院図書館(図書室)に勤務するものが3名の計7名であった。

討議は、メンバーの一人が勤務するK病院図書室を例に、利用しやすい図書館を目指して、主に資料構築と専門職としての司書の役割の2点を核に行われた。本グループに課されたテーマ「資料構築」は、予算・利用者・館種など図書館の置かれた環境と不可分であること、またメンバーの中から本研修の共通課題である司書の専門性について問題提起があったため、事例を基に討議した。

II. K病院図書室について

K病院は、職員数が456名(うち医師数42名)、病床

数が320床の中規模の総合病院である。医局の隣に設置されたK病院図書室は、24時間開館しており、利用対象は職員である。司書は1名で対応しているが、外来が多忙な時は応援に行くなど、常駐とは言えない。貸出は基本的に行っていない。PC4台(うちイントラネット専用端末1台)が設置されており、文献検索DBが利用できる。ILLは年間で依頼が100件、受付が400件である。

資料構築は、雑誌が中心である。洋雑誌32タイトル、和雑誌50-70タイトルを購入しており、電子ジャーナルはプリントプラス契約のみである。雑誌の永久保存・廃棄については明文化されており、毎年、医師が選定した永久保存雑誌以外で、かつ、10年経過した雑誌は廃棄している。雑誌の利用は、電子ジャーナルよりも冊子体雑誌の利用の方が多く、それらをブラウジングしている利用者がよく見られる。予算の関係上、図書の新規購入は行っていない。

実際の利用は一部の医師10名程度に限られている。利用者の多くは、高齢なこともあり、PCの利用には抵抗があるようだ。反対に、文献データベースを用いて文献検索を行うような若い医師も見られる。

¹⁾ Kyoko TSUNEDA : 〒274-8510 千葉県船橋市三山2-2-1.
Tel.047-472-9413 tsuneda@mnc.toho-u.ac.jp

²⁾ Saki YAMAMOTO

³⁾ Takahiro IDE, ⁴⁾ Miyuki ODA, ⁵⁾ Nao TAHIRA,

⁶⁾ Mieko NAKAYAMA, ⁷⁾ Yuko HASEGAWA

(2007年9月14日 受理)

Ⅲ. 利用しやすい病院図書室の展開へ

1. 資料構築に関する意見交換

K 病院図書室の現状を踏まえ、資料構築について意見交換を行った。まず、電子ジャーナルの導入について、PC や電子ジャーナルに抵抗のある利用者に対して、人的サービスで補完し、電子ジャーナルを積極的に導入していく、また、患者の生命に関わる場合、情報入手の即時性が必要なため電子ジャーナルの利用を考慮する、という賛成意見が挙がった。それに対して、予算の問題と利用者を見る限り、紙媒体の方が利用しやすく電子ジャーナルへの切り替えは急ぐ必要はないという反対意見が挙がった。また、無料の電子ジャーナルを積極的に取り入れてはどうか、という意見も出た。

次に、全蔵書における図書の割合が少ないことに関して、図書の利用が多い学生とは異なり、医師は専門家であるため、図書は必要ないのではないかという意見が出た。それに対して、他の病院図書室では、看護師が図書資料を頻繁に利用しており、加えて、患者もよく利用していることが報告された。このことから、潜在的利用者の看護師や今後利用者となりうる患者を考慮し、図書室の利用者を増やしていくために、図書は必要であるという意見が挙がった。図書の選定には、選定ツール¹⁾などをうまく利用したらどうかという意見も出た。

2. 専門職としての司書に関する意見交換

続いて、利用しやすい病院図書室を運営するために、司書は何をすべきかについて討議を行った。その結果、様々な利用者を理解し、専門的なサービスを提供することで、多くの利用者から選ばれる病院図書室を構築するという結論に至った。加えて、司書の継続的なスキルアップの必要性を参加者全員が認識した。

利用者に選ばれるためには、利用者を知り、ニーズを満たすような図書室運営を行っていく必要がある。病院図書室は、さいわい、一人職場である場合が多く、業務の全ての段階を一人でこなす点や、ある程度利用者が限られているという点から、利用者との距離が近いといえる。利用者は、図書館に対する不満を口に出すことは少ないが、司書は利用者との距離の近さを活かし、不満や要望などを拾い、利用者側から見た病院図書室を理解し、図書室を運営しなければならない。また、医師や看護師など医学の専門家である利用者とのコミュニケーションをとることは、医療・医学情報について知るよい機会でもある。

K 病院図書室が利用者に選ばれるためには、図書室を利用したことがない層に働きかける必要があるという意見も出た。K 病院図書室の潜在的利用者層として看護師が挙げられる。看護師の利用が多い他病院図書室司書からは、看護師に対する学術情報リテラシー教育が重要であるという意見が出された。看護師が、文献検索結果の全てを探している文献の全てだと捉えてしまった事例や、また、看護師の経歴はさまざまであるといった現実から、その問題を認識した。そのために行った看護師向け文献検索オリエンテーションが好評であったため、学術情報リテラシーの集団教育が有効であると感じたという報告がされた。

以上の事例報告を基に、看護師向けのサービスを展開していくという提案がなされた。具体的には、看護師向けパスファインダーや、ニュースレターの作成、また、公共図書館を参考にしたテーマ別の本の展示やリストの作成である。

また、将来的に実現されるであろう患者向けの情報提供サービスを視野に入れた図書室運営を行う必要があるという意見が出された。患者サービスにおいても、利用者である患者のことを理解し、サービスを展開していく必要がある。患者は医療情報そのものを求めるのではなく、医師とコミュニケーションをとるために情報を求めているのではないかとという意見も挙げられた。それを踏まえ、空間・場所としての図書室についても話し合い、現状の図書室は医局の隣にあるため、患者は気軽に入れないのではないかと指摘があった。本の処方箋サービスなど、医師との協働も考慮する提案が出された。

3. これからの病院図書館像とその実現へ向けて

討議は、利用者に選ばれる病院図書室であることが重要だという結論に至った。その実現には、これからの病院図書室像を視野に入れた図書室運営を行わねばならない。

資料構築に関して、今すぐできることには、無料電子ジャーナルの導入があろう。図書室利用者が使う PC のデスクトップに無料電子ジャーナルへのリンクショートカットを配置するという方法で、直ちに実現できる。予算等に関わらず容易に実行できるようなサービスを提供するためには、医学情報流通についての最新動向を把握しておくことが必要である。次の段階では、現在の資料構成の見直しを行う。今後の病院図書室像を視野に入れ、現状の冊子体雑誌重視や図書資料の扱いを、今後の利用者層をも含めて想定し検討する。現在、利用の中心

をなす医師たちは、電子媒体への抵抗感が大きい。しかし、K病院の医師全体の年齢分布を鑑みると、無料電子ジャーナルの普及をはかり、メディカルオンラインをはじめ、診療に直結する電子資料を徐々に導入する中で、電子媒体への抵抗感が漸減することが容易に予想される。将来的には、書庫スペースの限界と共に、いずれかの時点で劇的な転回へ繋がることも予想される。最終的には、これからの利用者層を考慮したサービスを展開していく。昨今、ILL利用の中心が看護文献にシフトしているとの報告²⁾もあるように、今後の利用者層としての看護師に着目したい。

看護師向けサービスの展開を段階的に説明すると、看護師向けパスファインダーやニュースレターを作成し、看護師に図書室について知ってもらう。次の段階で、文献検索オリエンテーションを行う。いずれは、教育担当部門と協働し、図書室として学術情報リテラシー教育の

面から看護研究援助を行っていくことをめざす。

IV. おわりに

議論を通じて、利用者には選ばれる図書館(室)を運営し、存在意義をアピールする必要性を認識できた。また、病院図書室に勤務するものは病院図書室の特徴、それ以外の図書館に勤務するものも自分が勤務する図書館の特徴を考えることができた。今後ともスキルアップを目指しながら、今回得たことを業務に活かしていきたい。

参考文献

- 1) アンドレア・ケニヨン, バーバラ・カシーニ著 (公共図書館による医学情報サービス研究グループ訳; 野添篤毅監訳). 公共図書館員のための消費者健康情報提供ガイド. (JLA図書館実践シリーズ; 6). 東京:日本図書館協会;2007.
- 2) 土屋俊ほか. 提言[internet]. http://cogsci.l.chiba-u.ac.jp/REFORM/Final_Report/2teigen.pdf [accessed 2007-09-14]